

1978年6月、司馬さんに対する懐の深さに感じ入る。伊予・西土佐の道」の取材で宇和島周辺を訪れた。その折、当時の図書館長、渡辺喜一郎さんに誘われ、僕のお車で宇和町（西予市）までお迎えに行った。

同行の、挿絵を描いていた画家の須田勉太さん、メラマンや出版関係の人たちと、まず1872(明治5)年築の小学校「明学校」に。そこから

司馬遼太郎と吉村昭

シーボルトの娘で日本初の西洋医学の女性医師、楠本イネが歩いた旧道を走り、法華津峠で眺望し宇和島に入った。

途中、バス停の地名をちらっと目にしても博覧強記、教養や歴史観から次々と言葉が紡がれる。吉田さんの姓は、もとは葦が生えていた湿田から来ているなどと言われ、作家の言葉に

司馬さんは宇和島で出会った人たちに対して「古風な都会人」と評しているが、この夜も心底交遊を喜んで風だった。受け入れ側は、やさしくもてなしつつも特別扱いせず、尊敬の内にも対等な接し方であった。そこが司馬さんにとっ



て居心地の良い場所だったのである。宇和島の歴史が関係する著作のための取材といっ

ただけではなく、十数回も足を運んだのはよほどのことであつたに違いない。司馬さんは書いている。日本

で一番好きな町は長崎と宇和島である。今考えると、小説家が絵かきをモデルに描き、別の絵かきがそれを持っている。妙で愉快な話ではある。(吉田 淳治・画家)